

# 道徳部会 研究の構想（案）

平成30年度～

## I 研究主題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

－主として自分自身に関すること－

## II 主題設定の趣旨

日本社会はグローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化がもたらす様々な影響により、将来の予測が困難な時代を迎えている。このような社会で生きて働く知識や力を育むために、「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった学びの質の転換が求められている。そして、その学びの過程となる「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するかが課題となっている。

道徳教育においては、「特別の教科 道徳」が令和元年度より全面実施となった。他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題として捉え、向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことが大切であると考え。

そこで、これまでの道徳の授業を改めて見直し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業にするには、具体的にどのような手立てを講じたらよいかについて研究することが必要であると考えた。改善の視点を「指導する教師が道徳的諸価値をどれだけ深く理解し、授業に臨むか」「生徒が学習課題を自分の問題として捉え、それを多面的・多角的に考えることを通して、人間としての生き方について考えるための手立ては何か」とし、この視点を軸として授業改善に取り組んでいきたい。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から見てみると、将来の夢や目標をもっている生徒が全国平均に比べて少ないことが浮き彫りになっている。このような実態から、まずは自分自身を大切に思う気持ちを育てることから始めたいと考え、「主として自分自身に関すること」を副題に設定した。自分自身の内面を見つめることで、真摯に自己と向き合い、自分との関わりで改めて道徳的価値を捉え、一個のかけがえのない人格として自己理解を深め、自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにしていきたい。

本研究は3か年を1サイクルとして研究を進めている。同じ内容項目で3年間の研究を行うことで、指導する教師の道徳的諸価値の理解を深めていきたいという意図がある。そのような深い価値理解を基本として、年次ごとに重点研究内容を設定し、焦点化された研究を推進していきたい。

## III 研究のねらいと内容

### 1 研究のねらい

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てるために、実践的研究を進める。

### 2 研究内容

#### (1) 年次ごとの重点研究内容

2018年度（平成30年度）…道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫

2019年度（令和元年度）…互いに関わり合っただ道徳的価値の理解を深め合う学習活動

2020年度（令和2年度）…評価との一体化を意識した指導

#### (2) 道徳科の授業を構想するための方策

#### (3) 道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

# 道徳部会 令和2年度研究計画（案）

## I 研究主題

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

－評価との一体化を意識した指導－

## II 主題について

平成30年度より、上記の主題の下に研究を推進している。令和元年度は、「互いに関わり合っ

て道徳的価値の理解を深め合う学習活動」を副題に研究を進めたところ、生徒が意見交換を行う場の設定を工夫し、活発に意見を述べ合う中で考えの深まりがある授業が展開された。発問を絞った授業構成や教師の適切な問い返しが、生徒が自ら考えを深める場をつくり出し、構造的に板書する工夫が、生徒の考えを整理し、思考を深めさせることにつながることで解明された。考えの深まりにつながる生徒同士の関わり合いのもち方についての研究を今後も継続していきたい。

令和元年度から全面実施となった「特別の教科 道徳」では、記述による評価を行うこととなった。評価文の作成については各地区や各校での研修を基に、初年度を終えたところであるが、今後も評価についての研修を行っていく必要がある。学習における評価は、生徒にとっては自らの成長を実感し意欲の向上につながり、教師にとっては指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となる。指導の効果を上げるためには、指導計画の下に、目標に基づいて教育実践を行い、指導のねらいや内容に照らして生徒の学習状況を把握し、その結果を踏まえて、教師自らの指導について改善を行うサイクルが重要である。そこで、今年度は当初の3か年計画の重点研究内容を変更し、「評価との一体化を意識した指導」を副題とした。道徳科の目標に即した授業改善と評価の充実につながるよう研究を推進していきたい。

## III 研究内容とその視点

3か年計画では、内容項目の四つの視点のうちの「A 主として自分自身に関すること」に重点を置いている。まず教師自身が道徳的諸価値について理解を深めた上で、どのように学習活動を行うことが道徳科の目標に即した授業となるのか、また、適切に評価できる授業となるのかを実践を通して明らかにする。

生徒が「自己を見つめ」「広い視野から多面的・多角的に」考える学習活動、「道徳的諸価値の理解」と「人間としての生き方についての考え」とを関連付けて考えを深める学習活動が展開されることによってはじめて適切な評価が可能となる。そのためには、指導する教師の道徳科の特質や道徳的諸価値に対する深い理解、教材分析に基づいた発問構成の吟味等、道徳教育及び道徳科の目標を基盤とした全体的な授業構想が重要である。この視点に基づいた研究実践を行い、継続的な研究につなげていきたい。

### 1 道徳科の授業を構想するための方策

#### (1) 道徳科の特質を生かした学習指導の展開

- ・特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育の目指す方向の対極にある。道徳科の目標を正しく理解した上で、教材を吟味し、ねらいとする道徳的価値について学習指導要領解説で確認したり、複数の教師で検討したりしていく必要がある。
- ・生活体験や教材の感想を発表するだけの活動や道徳的価値の観念的・一面的な理解に終始することなく、生徒自身が人生の課題や目標に向き合い、道徳的価値を視点に自らの人生を振り返り、これからの自己の生き方を主体的に判断するとともに、人間としての生き方について理解を深めることができるよう支援する。
- ・教師が生徒と共に人間の弱さを見つめ、考え、夢や希望等を語り合うような姿勢を大切に

## (2) 教材分析と発問の吟味

- ・教材を適切に分析し、生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討した上で授業を構想する。分析した結果を図や表等に表して可視化し、分析結果の共有や研究成果の蓄積に役立てる。
- ・生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問等となるよう工夫する。
- ・生徒の考えを深めるための、補助発問や問い返し、つなげたり深めたりする問いを準備する。

## 2 生徒を認め励まし、指導に生かす評価の充実

道徳科の目標と評価の意義を知り、「道徳科の評価は生徒の授業における学習状況や道徳性に係る成長の様子について、継続的に把握したことを個人内評価として、記述式で行う。道徳科の授業に係る生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるように励ますために評価を行う」とする評価の基本的態度を理解した上で、各生徒の評価文を書く必要がある。生徒がよりよく生きようとする思いを励まし勇気付ける評価とはどのようなものであるのかについて研究を進める。また、生徒の学習状況の把握を基に、授業についての評価を行い、教師自らの指導を評価し、その評価を授業の中で更なる指導に生かすことで、道徳性を養う指導の改善につなげる。

### (1) 生徒の学習状況及び成長の様子についての評価

道徳科の授業における各生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子について、どう見取り、どう蓄積するのか、評価の妥当性、信頼性を担保するために、組織的、計画的に研究と実践を行う。

生徒の成長の様子を見取る材料としては、次のようなものが考えられる。

- ・発言した内容（授業記録、板書の記録写真等の活用）
- ・感想や学んだことを記述した内容、生徒の自己評価（道徳の授業ノート、学期ごとの振り返り等の活用）
- ・取組の様子（対話的な姿勢や自分事として考える姿勢についての観察記録、教師や他の生徒の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしていたりしている姿の観察記録等）

これらを蓄積する方法を工夫し、大きくりのまとまりの中で見取るように努める。

### (2) 授業に対する評価

生徒の学習状況の把握を基に、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に生かすように努める。評価の観点としては、例えば次のようなものが考えられる。

- ・学習指導過程は適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものであったか。
- ・発問は、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- ・生徒の発言を傾聴して受け止め、生徒の反応を適切に指導に生かしていたか。
- ・自分自身との関わりで、物事を広い視野から多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- ・ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、生徒の実態や発達段階にふさわしいものであったか。
- ・特に配慮を要する生徒に適切に対応していたか。

## IV 研究方法

- 1 前年度までの研究成果の蓄積を確認した上で、研究の継続性を意識し、本年度の研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践活動を通して主題の解明に努める。
- 2 各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区で研究を深める。
- 3 各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
- 4 各郡市、地区の研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

